



TITLE:

京大広報 No. 483

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 483. 京大広報 1995, 483: 938-947

ISSUE DATE:

1995-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209151>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 483

京都大学広報委員会



前期日程試験合格者発表（3月9日工学部にて）

目次

兵庫県南部地震について

一見舞金と支援事業— 総長 井村 裕夫…939

<大学の動き>

平成6年度修士学位授与式…939

平成6年度卒業式…939

平成6年度医療技術短期大学部

卒業式・修了式…940

平成7年度医療技術短期大学部

入学者選抜試験の結果…940

部局長の交替等…940

<紹介>

人文科学研究所における国際交流…942

<保健コーナー>

「嘔むことの大切さ」…943

計報…944

平成7年度文学部博物館

春季企画展の開催…945

<随想>

曖昧さこそ日本人の天性

名誉教授 岸根 卓郎…946

<コラム>

教育学部創設から45年

田中 昌人…947

兵庫県南部地震について ―見舞金と支援事業―

総 長 井 村 裕 夫

兵庫県南部地震で甚大な被害を受けられた被災者の方々にお見舞金をお贈りするべく教職員を対象として義援金の呼びかけをいたしましたところ、大変多くの方々の御協力を得て厚く感謝しております。集まりました義援金の総額は、1,226万円に達しました。御協力頂いた皆様に心からのお礼を申し上げます。ありがとうございました。

集まりました義援金については部局長会議にお諮りして、次のように配分いたしましたので、御報告申し上げます。

- 1) 本学被災者へのお見舞金：死亡された文学部4回生山中祥子さんの御遺族及び家屋の全・半壊の被害を受けられた教職員の方々25名 計625万円
- 2) 神戸大学、神戸商船大学へのお見舞金：それぞれ200万円及び100万円
- 3) 被災地域への義援金（日本赤十字社経由）：301万円

なお、本学と国際交流協定を結んでおります米国のブラウン大学から、神戸の被災者への義援金として、2,500米ドルが贈られて参りましたので、被災地域への義援金に追加させて頂くこととなりました。ブラウン大学グレゴリアン学長の国境を越えた温い友情に、心から感謝いたします。

次に支援事業としては、被災地域への医療チームの派遣、被害調査団の派遣、神戸大学及び神戸商船大学への物的、人的支援など様々な活動を大学レベルで行って参りました。また、学会あるいは個人のレベルで救援活動にあたられた方も多いと思います。多忙の中これらの支援活動に参加された皆様に、深い敬意を表します。



<大学の動き>

平成6年度修士学位授与式

3月23日(木)午前10時から、平成6年度修士学位授与式が、本学総合体育館で挙行された。

学位授与式は、名誉教授をはじめ来賓出席のもとに行われ、学位記授与、「総長のことば」があって、午前10時35分終了した。

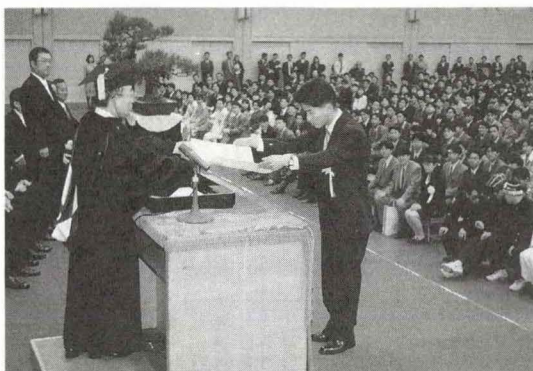
本年度の修士課程修了者は、文学研究科67名、教育学研究科13名、法学研究科53名、経済学研究科32名、理学研究科204名、薬学研究科63名、工学研究科644名、農学研究科198名、人間・環境学研究科111名の計1,385名であった。

平成6年度卒業式

3月24日(金)午前10時から、平成6年度卒業式が、本学総合体育館で挙行された。

卒業式は、名誉教授をはじめ来賓出席のもとに行われ、学歌斉唱（京都大学音楽部交響楽団、京都大学合唱団が協力）、学位記授与、「総長のことば」のあと、「蛍の光」を斉唱して、午前10時50分終了した。

新学士は、文学部228名、教育学部76名、法学部417名、経済学部272名、理学部291名、医学部125名、薬学部78名、工学部904名、農学部296名の計2,687名であった。

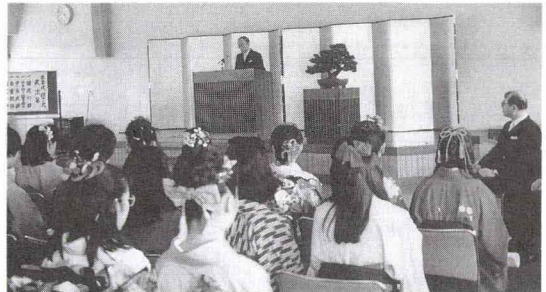


平成 6 年度医療技術短期大学部 卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、3月17日(金)午前10時から、本短期大学部講堂において来賓の臨席のもとに、短期大学部卒業式及び修了式を挙行了。式は卒業証書・修了証書授与、学長式辞、来賓祝辞と進行し、午前11時終了した。卒業生は、看護学科80名、衛生技術学科35名、理学療法学科23名、作業療法学科16名で、修了生は、専攻科助

産学特別専攻20名の計174名であった。

(医療技術短期大学部)



平成 7 年度医療技術短期大学部 入学者選抜試験の結果

医療技術短期大学部では、平成7年度入学者選抜試験を3月2日(木)、3日(金)に実施し、その

合格者氏名を11日(土)に発表した。

受験者数及び合格者数等は次のとおりである。

学 科	募集人員	志 願 者 数	受 験 者 数	合 格 者 数
看 護 学 科	80 人	275 人	241 人	107 人
衛 生 技 術 学 科	40	343	285	60
理 学 療 法 学 科	20	201	166	26
作 業 療 法 学 科	20	132	104	26
計	160	951	796	219

(医療技術短期大学部)

部 局 長 の 交 替 等

附属図書館長

朝尾直弘附属図書館長の任期満了に伴い、その後任として長尾 真工学部教授(有線通信工学講座担当)が4月1日任命された。任期は平成10年3月31日までである。

総合人間学部長

児嶋眞平総合人間学部教授(物質環境論講座担当)が4月1日総合人間学部長に再任された。任

期は平成8年3月31日までである。

文 学 部 長

水垣 渉文学部教授(宗教学第二講座担当)が4月1日文学部長に再任された。任期は平成8年3月31日までである。

法学研究科長・法学部長

鈴木茂嗣法学研究科長・法学部長の任期満了に伴い、その後任として村松岐夫法学研究科教授(現代政治行政分析講座担当)が4月1日法学研

究科長・法学部長に任命された。任期は平成9年3月31日までである。

経済学部長

浅沼萬里経済学部長の任期満了に伴い、その後任として菊池光造経済学部教授（比較社会・経済政策講座担当）が4月1日経済学部長に任命された。任期は平成8年3月31日までである。

理学研究科長・理学部長

佐藤文隆理学部長の任期満了に伴い、その後任として鎮西清高理学研究科教授（地球テクニクス講座担当）が4月1日理学研究科長・理学部長に任命された。任期は平成9年3月31日までである。

医学研究科長・医学部長

菊池晴彦医学研究科教授（脳神経外科学講座担当）が4月1日医学研究科長・医学部長に再任された。任期は平成9年3月31日までである。

医学部附属病院長

吉田 修医学研究科教授（泌尿器科学講座担当）が4月1日医学部附属病院長に再任された。任期は平成9年3月31日までである。

工学部長

西川禎一工学部長の任期満了に伴い、その後任として曾我直弘工学部教授（無機材料化学講座担当）が4月1日工学部長に任命された。任期は平成9年3月31日までである。

農学部附属演習林長

神崎康一農学部教授（林業工学講座担当）が4月1日農学部附属演習林長に再任された。任期は平成9年3月31日までである。

人文科学研究所長

阪上 孝人文科学研究所教授（西洋社会研究部

門担当）が4月1日人文科学研究所長に再任された。任期は平成9年3月31日までである。

胸部疾患研究所長

泉 孝英胸部疾患研究所長の任期満了に伴い、その後任として人見滋樹胸部疾患研究所教授（生体調節・再建学研究部門担当）が4月1日胸部疾患研究所長に任命された。任期は平成9年3月31日までである。

原子エネルギー研究所長

高橋幹二原子エネルギー研究所長の任期満了に伴い、その後任として西川禎一工学部教授（計測制御工学講座担当）が4月1日原子エネルギー研究所長に任命された。任期は平成8年3月31日までである。

木質科学研究所長

佐々木 光木質科学研究所長の任期満了に伴い、その後任として榎原正草木質科学研究所教授（木質バイオマス研究部門担当）が4月1日木質科学研究所長に任命された。任期は平成9年3月31日までである。

ウイルス研究所長

畑中正一ウイルス研究所長の任期満了に伴い、その後任として伊藤嘉明ウイルス研究所教授（がんウイルス研究部門担当）が4月1日ウイルス研究所長に任命された。任期は平成9年3月31日までである。

経済研究所長

福地崇生経済研究所長の任期満了に伴い、その後任として佐和隆光経済研究所教授（数量産業分析研究部門担当）が4月1日経済研究所長に任命された。任期は平成9年3月31日までである。

放射線生物研究センター長

佐々木正夫放射線生物研究センター教授（突然変異機構研究部門担当）が4月1日放射線生物研

究センター長に再任された。任期は平成9年3月31日までである。

放射性同位元素総合センター長

栗原紀夫放射性同位元素総合センター教授（アイソトープ動態論担当）が4月1日放射性同位元素総合センター長に再任された。任期は平成8年

3月31日までである。

情報処理教育センター長

矢島脩三工学部教授（論理回路講座担当）が4月1日情報処理教育センター長に再任された。任期は平成9年3月31日までである。

<紹介>

人文科学研究所における国際交流

本研究所における研究活動の主な特徴のひとつは、共同研究を中心として学際的な基礎研究を推進するところにある。研究所の多くの共同研究が、当該研究分野において国際的に高度な水準にあることは、国内外の第一線の研究者たちによって既に認められてきた。そこで本稿では、共同研究の活動を通じて、海外の学界との緊密な協力関係が発展してきた点について、若干の報告を行ってみたい。

国際交流は、いずれの部門においても極めて活発に行われてきたが、昭和56年（1981）以降に増設された比較社会部門、日本学部門の運用によって、優れた外国人研究者が常時、共同研究に参加し、さらに幅広い国際学界との密接な交流の実が結ばれてきた。研究所発足時より受け入れてきた外国人研究者は延べ400人近くを数え、上述の2部門で招請した招聘外国人学者、外国人研究者に限ってもすでにその数は30余人に及んでいる。その他、外国人学生で本研究所で研修した外国人研修員はこれまで200人余りの多数にのぼり、その多くが本研究所の共同研究にも参加して来ている。また、世界各国で開催される国際研究集会への所内研究者の参加が活発に行われていることは言うまでもないが、さらに近年においては海外の研究者との国際共同研究も組織されていることをも付け加えておかなければならない。例えば、平成5（1993）年度から開始されているイタリアの学術機関との協力によるパキスタン仏教遺跡調査のような、大掛かりな国際共同研究も組織されているのである。

さて本研究所ではこの度、第三者評価の試みの一環として、これまでに本研究所が国内客員部門および外国人客員部門で招請した旧客員の研究者に対して、後述のようなアンケート調査を実施した。その成果は近く『人文科学研究所・第三者評価報告書—旧客員への調査票回答による—』（仮題）として公表される予定であるが、とりあえず以下に外国人客員からの回答に限ってその概要を紹介して、本稿の責めをふさぐこととしたい。

今回の調査は、世界各国の約30人の外国人学者を対象にしているが、回答率はほぼ76%であった。おもな質問事項は、以下の通りである。①参加した共同研究（または臨時講演会やセミナー）についての評価。②それ以外の人文科学研究所の学術活動や研究組織についての評価。③人文科学研究所の出版物等についての評価。④人文科学研究所の図書室、東洋学文献センターについての評価。⑤人文科学研究所の会議室、研究室、談話室などの施設についての評価。⑥招聘決定の時点から着任、帰国までの事務手続きや事務担当者についての所感。⑦現在の所属機関と人文科学研究所との将来の研究交流についての提言。⑧滞在中の生活条件等についての所感、等々。ここではいくつかの目立った特徴についてだけ簡略に報告しておきたい。

まず共同研究のありかたについてであるが、おおむね高い評価が下されているといっている。「きわめて高度な学識が各班員、各参加者の間を、自由に活発に飛び交っていること、そしてまた研究所内外の有能の士が、健全な比率でバランスよく混合されていること」に感銘を受けたと述べるとともに、出版物等の形で公表されたその成果の水準は分野によっては「欧米のそれを越えてい

る」と断言する回答者も幾人かいた。また研究者相互の共同作業ないし交流についても、個人主義の発達した欧米ではきわめて困難であることを指摘した上で、「異なった研究分野の専門家相互の間に有益な影響関係が十分に機能して」いることを特記した回答が目立った。一方、本学他部局との交流がもう少し盛んになっていいのではないかと、との提言や、研究所における日常生活に関しては、共同研究会以外での交流の機会を増やすべきであり、そのためには談話室等の施設の拡充といっそうの活用が望まれるとの指摘もいくつかあった。また回答者の現在の所属機関と本研究所

との将来の研究交流についても、これを積極的に推進したいとする回答者が多数を占め、そのための具体的かつ建設的な提案もいくつか寄せられた。

言うまでもなく以上の紹介は、多岐にわたる内容豊富な調査票回答のほんの一部に過ぎず、くわしくは上述の報告書を参照されたいが、人文科学研究所では今後これらの評価、批判、提言を十分に吟味検討して、数年後には七十周年を迎える本研究所の将来構想にも役立てたい、と考えているところである。

(人文科学研究所)

<保健コーナー>

「噛むことの大切さ」

平成6年度厚生省の歯科疾患実態調査によると、成人の虫歯（齲蝕）は12年前の調査時に比べると増加傾向にあり、若年者（20歳以下）の齲蝕はむしろ減少していることが明らかになった。また成人、若年者ともに、智歯の生え方（萌出）の異常で何らかの処置が必要な患者の割合は、年々少しづつ増加している。口腔疾患に何か変化が起きつつある。最近、この萌出異常に関して、ある人類学者は、歯の大きさおよびその数と、歯が並ぶ顎の大きさの不調和（tooth to denturebase discrepancy）を指摘している。すなわち、歯の大きさとその数に比べて、歯が並ぶ顎の大きさが小さいのだ。顎が小さいと萌出順序の遅い歯は萌出時期の遅延や萌出期間の延長がおこる。たとえ萌出しても、十分なスペースがないので乱杭歯になり、最悪のものは埋伏歯になる。特に萌出順序の遅い智歯はこの影響をもろに受ける。現代人は古代人に比べ、顎と歯の縮小、単純化がみられるといわれているが、人類の長い進化の過程からみて、本来現代人の体は1万年以上前の旧石器時代から殆ど変化していないらしい。ところがこの数十年、文明は凄まじく変化し、生体としての適応の限界を越えてしまい、そこに進化と文明の不調和が起きている。そして、歯と顎の不調和はこれを象徴しているのだといわれている。

顎も歯も遺伝的影響を受けているが、特に顎はその成長過程で後天的影響を受けやすい。親子や兄弟姉妹でも歯並びや顎の大きさが違う人は珍しくない。最近の調査では、この不調和には時代差、地域差が著明にみられる。しかし、このような不調和は、縄文時代前半では殆どみられなかったものが、弥生時代では19%、中世では32%、江戸時代では43%となり、近代に近づくにつれてその割合が増え、現代の成人では63%と高い頻度でみられる。また智歯に注目してみると、智歯が3～4本萌出し、正常に咬合している人が、西北ネパールのシュミコット地方では70%に対し、日本では10%前後である。これらの不調和の原因には、食文化が大きく関与していることを物語っている。この数十年（日本では特に戦後50年）の間に、堅く、栄養価が低い大量にとらなければならなかった食物から、軟らかくて栄養価が高く、消化吸収するのに咀嚼を必要としない加工品が多くなった地方では人の顎の発達は極めて悪くなった。一方、標高3,000mの高地に住み、外部との食文化の交流が殆どないため、粉碎加工した柔らかい食物や砂糖を手に入れることもできず、先祖代々ほぼ自給自足の質素な食事で育ったシュミコットの人々は、齲蝕が少ないばかりでなく、歯の萌出異常も少ない。

また、噛むことは顎骨の成長にだけ影響するものではない。丈夫な食べ物を何度も噛み、唾液分泌を促進し、唾液中の消化酵素と食べたものを良

く混ぜ合わせることは消化の助けにもなる。また、主に顎下腺（顎の下にある唾液の袋）から分泌される唾液中には上皮増殖因子（EGF）が含まれている。これは線維芽細胞増殖因子（FGF）、トランスフォーミング増殖因子- α （TGF- α ）などと同様に消化管の潰瘍治癒を促進することが解っている。

現在、65歳以上の高齢者は10%前後であるが、厚生省は2021年には25%になると予測している。その頃の老人はいったい何本の歯をもっているだろうか。歯周病で歯を失う人が増加しているのだ。つい最近まで人生50年といわれていた。40歳頃を過ぎると体に不都合がでてきたり、歯が抜けたりする。極端な言い方かもしれないが、自然界に生きる動物は体が衰えたり、歯が無くなると餌をとることができず衰弱死する。即ちこの時点がその動物の寿命なのだ。現代人も自然界で生きるとすれば例外ではない。文明の中で暮らしていても、一般には生きているかぎり、老人になっても食物をとらなければならない。歯の欠損には入れ歯をいれれば良いとよくいわれるが、総入れ歯の人の咀嚼能率は歯が全部揃っている人のたったの

25%である。自分の歯で噛むことがいかに大切なことかはいうまでもない。他に、ある施設の調べでは、カフェイン入りの飲み物をとるよりもガムを噛むほうがはるかに脳血流量が増加するという。また何回も繰り返す咀嚼運動は、年齢に関係なく、脳血流量を有意に増加させることが分かった。噛むという単純な運動がある意味では脳の老化防止の助けになるかもしれない。

では、現在残っている歯を長持ちさせるにはどうすればよいのかと思案する人もいるかもしれない。しかし、それは実に単純なことである。口腔内には何十億という数の細菌がいるといわれるが、齲蝕や歯周病は歯に付着した歯垢の中の原因菌の活動で発症するので、これを毎日、完全に除去することである。幸いなことに歯垢は一旦完全に除去してしまうと、再び付着して増殖するのに24時間以上かかる。それ故、一日一回、一本一本適切な方法で丁寧に歯磨きを行えばよいことになる。今一度、本当の健康とはどういうものかを考えてほしい。口腔も自分の体の一部なのだから。

（保健診療所 藤村和磨）

訃 報

平 田 清 明 名誉教授

本学名誉教授 平田清明 先生は、3月1日逝去された。享年72。

先生は、昭和22年東京商科大学を卒業された後、横浜国立大学助教授、埼玉大学助教授、名古屋大学助教授、同教授を経て、同53年京都大学経済学部教授に就任、経済原論講座を担当された。昭和61年停年により退官され、翌年京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和57年1月から同59年3月まで経済学部長、また同58年5月には京都大学長事務代理として、本学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、昭和61年4月から神奈川大学教

授、平成2年4月から同5年3月まで同大学副学長を勤め、さらに平成6年4月からは鹿児島経済大学学長の任にあった。

先生は、経済理論と経済思想史の領域で多数の著作を残された。なかでも、ケネーの「経済表」を図表的に解析した『経済科学の創造』と、資本循環論を基礎にして中期マルクスの経済理論を探究した『経済学と歴史認識』は、高い評価を受けた学術的労作である。また、マルクスの市民社会認識を発掘し、彼の社会主義が個体的所有の再建と位置づけられていることを強調したことは、学界の範囲を超えて大きな反響をよんだ。晩年はフランスのレギュレーション理論に関心を示されていた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（経済学部）

平成7年度文学部博物館 春季企画展の開催

本学文学部博物館では、下記のとおり春季企画展「旧石器人のアトリエ」を開催いたします。本学の教職員・学生は無料です（職員証又は学生証を呈示のこと）。

記

期 間 5月9日（火）～6月24日（土）
開館日時 火曜日～土曜日 9：30～16：30
（入館は閉館30分前まで、日・月は休館）
場 所 博物館 企画・総合展示室（1F・2F）

展示内容

企画展「旧石器人のアトリエ」

大阪府羽曳野市翠鳥園遺跡は、発掘継続中の旧石器時代遺跡で、昨年度までに出土した2万5千点の石器資料は目下整理中であるが、すでに150点以上の接合個体を確認している。

2万年前に狩猟に用いるために石器を作った人々が、どのように石を割っていったかのすべてを理解させてくれる。どこに腰をおろし、どちらを向いて、石を割って石器を作ったかという人の動作を具体的に語ってくれる我が国最初の発掘資料である。それらを全点展示することになった。

なお、博物館では同時に、常設展「日本古代文化の展開と東アジア」および「日本の古文書」も開催する。

（文学部）



2万年前に作られたナイフ形石器

